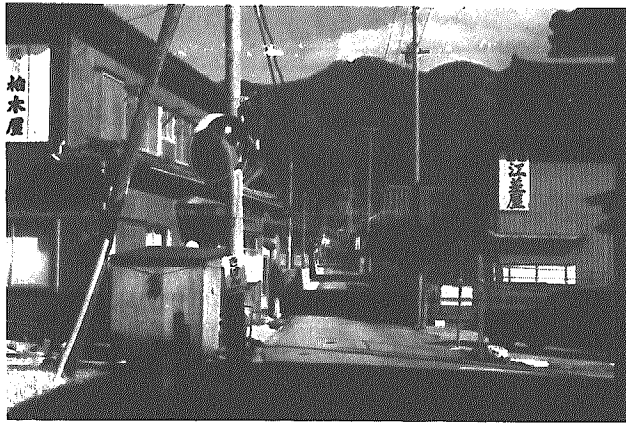


シリーズ
12
間瀬2区

人馬往来の玄関口

今月の「おじゃまします」地域情報ネットワークは、春のやわらかい陽差しと、ほのかな磯の香に誘われて、その昔？間瀬の玄関口といわれた間瀬二区におじゃましてみました。

「ここは現在、人口が九十人で、世帯数が三十二世帯と間瀬の行政区（間瀬二区は一区から七区に分かれています）の中では、もっとも小さな地区です。だから、というわけではないけど、これは、とって取り上げるようなことはないね。全体に全村的動きが多いせいかもしれないが……。でも地域性という



柏木屋や江差屋といった民宿の看板が往時をしのばせる感じの間瀬2区

かいい点は、小さな区だけあって地区内のみとまりといった協調性は実にいいね。たとえば隣の一区と合同（本村地区）で毎年忘年会なんかを開いているのが、その一例かな」と地区の状況を話す区長の幸村喜平さん。「そのうえ、子供たちを中心にした家族単位のつきあひもすごくいいね。毎年、花見だとかキャンプだとかいってマイクロバスを仕立ててやっているようだ。これは人数的に手ごろ？なこともあるけど、みんながもちろん知り合いなので、意志の統一ができれば、すぐまとまるようだね。そんな、ふだん着のつきあひが誇れることといえはいるかなあ」とニコニコ話してくれた幸村さん。

ところで、なぜリード文で「間瀬の玄関」とご紹介したかというと、県営の有料道路——越後七浦シーサイドライン（昭和四十九年）のバイパスができるまでは、ご年配のみなさんだと思われていますが、ここ二区に間瀬のバス停留所があったからです。「昔から比べると、この辺もずいぶん静かになったね。道路が一方通行になったせいもあるけど、バイパスの完成で車の流れが本当に変わったね。それまでは、柏木屋さんの所にバスの車庫（停留所）があって、ここが文字どおり間瀬の玄関口みたいなものでした。その昔は、旅館や駄菓子屋、タバコ屋やアイスクャンデー屋なんかもあって、それはそれはにぎやかな所でした。そのうえ、間瀬漁協もここ二区にあるので、魚のセリ市などで人通りも多かったねえ。とくに印象深いのは、

現在の港の所が海水浴場で、夏の土用の丑の日ともなると海水浴客でごったがえしていたことだ。当時はまだ馬車や牛車・自転車が目立った。きたない話だけど、こちら辺の道は牛や馬のふんでいっぱいだった。それもにぎわいの証拠だったようだ。周りの家の人たちに「落とし物!?」とっては、あまり歓迎できる「落とし物!?」じゃなかったが、そのころはみんなのんびりだったのかねえ。今だったら、それこそ一騒動あるんだろうけど……」と昔のにぎわいを懐しそうに話す幸村さん。正直なところ、いまではちよつと想像しにくいことですね。も人と人とのふれあいというか人情味みたいなものは、昔同様の雰囲気だと思ふよ。隣近所同士とつても仲がいいし、とくに若いものの行動には、年寄り？から見てもうらやましさがあがるね。これからは、そんな若い人たちの力と昔ながらの心の交流といったものを大切に、温もりのある二区にできれば……」と期待を話す区長さんの言葉から、少しづつではあるが波のような確かな新しい動きを感じる間瀬二区でした。



間瀬2区区長 幸村喜平さん (75歳)



八幡神社から漁港を望む

間瀬2区ミニデータ (人口と世帯)

人口	90人
男	40
女	50
世帯数	32世帯

(平成元年2月1日現在)

編集後記

■今月号でご紹介した小学生と文化財ボランティアの人たちの珍しい伝承講座——。最近ではほとんど見られなくなった縄なえや俵づくり。子供たちにとっては初めて見るものばかりとあって、お年寄りの手慣れた作業を珍らしそうに見入っていました。■その後、子供たちも実際にワラを持って縄づくりなどに初挑戦。いつもならワイワイ、ガヤガヤとにぎやかな子供たちも、この日はばかりは、どの子も真剣そのもの。中には「勉強より楽しいね」なんて子もいるほど大好評な催しでした。■「フキノトウが出たとか、ツクシがもう顔を見せたとかいう話を早くから耳にしました。何しろ暖冬です。取材行っても、まず話題になるのが「今年は雪がなくていいね」。お年寄りに聞いても「こんな冬は記憶にない」とのこと。広報担当としては、活動しやすい暖冬で助かっていますが、一方では村勢要覧用の「冬景色」の写真が押さえられず四苦八苦。とは言っても、個人的には雪を忘れた！今年の冬に感激。何を隠そう、わたしは真夏の生まれのせいかわたしには滅法弱いのです……。 (み)